

## FIAFバルセロナ会議報告

A Report on the 69th FIAF Congress in Barcelona

## マルチバージョンとメタデータ標準規格

大澤 浄

Jo Osawa

4月21日から27日まで、第69回国際フィルム・アーカイブ連盟(FIAF)会議がスペインのバルセロナで開催された。本稿では、そこで催されたシンポジウムを中心に今会議の概要を報告し、そこで取りあげられた重要な論点を紹介する。

デジタル時代を迎え、映画フィルムの生産消費が極端に凋落しつつある現在、フィルム・アーカイブはいかに自らの使命を再定義するのか。その一つの答えは、作品として完成した映画フィルムを適正に保存することにとどまらず、完成に至るまでのフィルムの多様な生成過程の歴史そのもの、ひいては「作品」そのものの複数性に保存学的な価値を見出し、積極的な意味づけをすることである。62ヶ国・110のフィルム・アーカイブから350人が参加した第69回国際フィルム・アーカイブ連盟(FIAF)バルセロナ会議のシンポジウム・テーマである「マルチ(複数)バージョン」は、世界のフィルム・アーカイブが抱えるそのような問題意識を、明確に打ち出した試みだった。

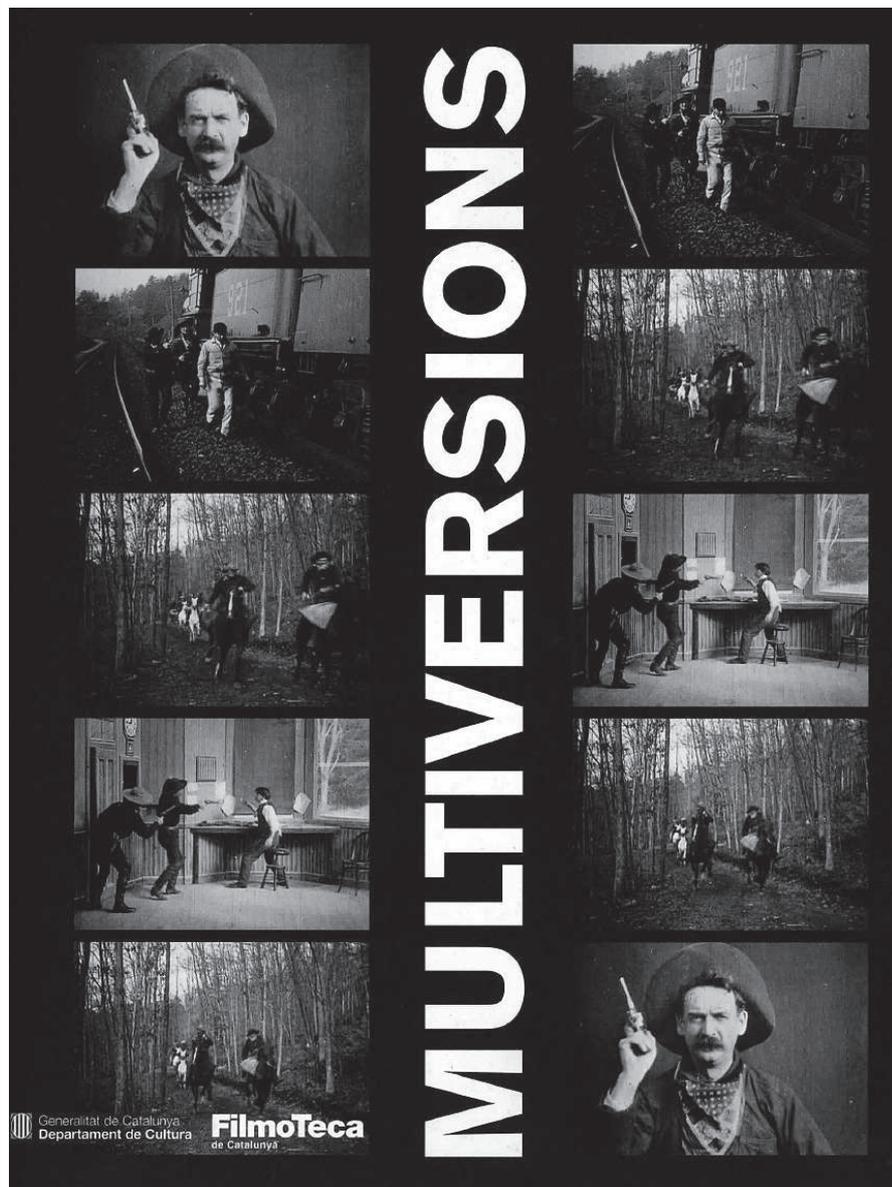
始めに会議全体を概観しておこう。ペドラルベス宮殿で催された初日の華やかなオープニング・レセプションに続き、上述の2日間のシンポジウムが開かれ、両日とも朝9時から夕方6時近くまで、計27の発表と質疑応答がなされた。4日目はFIAFの3つの委員会によるワークショップや地域会合等、現在進行形の課題が様々なレベルで話し合われた。同日の「映画第二世紀フォーラム」では、フィルムセンターから岡島尚志がパネリストとして参加し、3月末に富士フィルムが映画の撮影/上映用フィルムの生産を停止したことを受けて、緊急報告を行った。5日目は施設見学で、最後の2日間は総会。クロージングにはホスト・アーカイブのフィルモテカ・デ・カタルーニャ(以下「フィルモテカ」)がドイツのフリードリヒ・ヴィルヘルム・ムルナウ財団と協力して復元したフリッツ・ラング監督の大作『ニーベルンゲン』二部作(1924年)がリセウ大劇場でオーケストラ演

奏と共に盛大に上映・上演され、ヨーロッパを中心とした映画遺産・映画文化のアーカイビングの充実ぶりを参加者に印象づけた7日間が幕を閉じた。

2日間のシンポジウムのテーマである「マルチバージョン」は、会場となったフィルモテカでの展示と上映の企画とも緊密に連動し、参加者の理解を促進する格好の機会を提供した。展示室で開催された「マルチバージョン」展覧会では、豊富な写真や解説が理解を助け、会議終了後の毎夜7時から行われた映画上映では、しばしばシンポジウム

で言及された映画作品が、アーキビストや研究者の講演付きで上映された。

たとえば、デンマーク映画協会(DFI, Copenhagen)のトーマス・クリステンセンは「ロシア向けの涙——デンマーク無声映画のマルチバージョン」と題したシンポジウム発表を行ったが、夜の上映ではそれに合わせて『アトランティス』(アウグスト・ブロム監督、1913年)が、「通常版」と「ロシア版」の2バージョンのエンディングを見せる形で上映された。クリステンセンによると、1910年代当時、ロシアの映画市場を非常に重視してい



▲「マルチバージョン」展覧会のカタログ表紙

たノルディスク社は、ロシア以外のヨーロッパ各国向けに作られた「通常」のエンディングと並行して、悲劇的な結末を好むロシアの観客向けの——しばしば不幸な——エンディングを作っていた。ノルディスクのこのようなマルチバージョン製作は当時よく知られており、『アトランティス』に関しては、原作者のゲルハルト・ハウプトマンがわざわざ同社に「ロシア・エンディング」の製作を禁じるという意向を示していた。にもかかわらず、シベリア地方の上映ではさすがにハウプトマンの監視の目も及ばないだろうという推測の下、主人公が病死するアンハッピー・エンディングが秘かに作られシベリアで公開された(!)という。この他にもフィルモテカ・エスパニョーラによって近年復元された『オーソン・ウェルズのフォルスタッフ』(オーソン・ウェルズ監督、1964年)の国際版や、英国映画協会(BFI, London)が他の7つのフィルム・アーカイブから素材を借りて復元したアルフレッド・ヒッチコック監督の『ゆすり』(1929年)の無声/トーキー両バージョンなど、マルチバージョンとその復元の成果が、研究発表と作品上映が組み合わされるという理想的な形で提供された。

一口に「マルチバージョン」と言っても、その範囲はきわめて多岐にわたっている。たとえば、リュミエール兄弟が「工場の出口」や「列車の到着」といった主題について、それぞれ複数のフィルムを撮影していたことはよく知られている。あるいは初期映画においては、複数の製作者たちによって主題の模倣や作品タイトルの一致、同一の出来事の映画化などが頻繁になされていた。トーキーが導入されると、映画市場は国ごとに細分化され、1本の映画作品は各国の言語に対応した複数の版を持つようになった。とりわけヨーロッパにおいては、吹き替え、あるいは撮影時から各国語版用の複数のスタッフ・キャストによる製作など、さまざまな試みがなされた。また「機内上映版」や「ドライブインシアター版」など、異なる上映場所に応じて編集された異版や、パテベビー等の小型映画やTV、VHS、DVDなど映画作品の二次利用時に生まれる異版なども存在している。さらには「ディレクターズ・カット版」、またフィルム・アーカイブや映画会社などによる「復元版」など、映画には2度目、3度目の「生」とも言うべきマルチバージョンの形態がある。1本の映画作品の歴史は、そのま

まマルチバージョン生成の歴史だと言っても過言ではない。この根底にあるのは、公衆に向けてくり返し上演される複製技術メディアという映画の存在論的特質である。映画は、演劇のようなライブ・パフォーマンスとは異なり、別の観客ごとに別の版を、原理的に容易に作るができるのだ。だからこそ、映画を保存する営為は、他のメディアのそれにもまして困難であり、面白い。

2日間のシンポジウムは、「方法論と事例研究」「無声映画」「トーキー」「検閲、再編集、共同製作」「復元」「保存とカタログニング」の6つのセクションに分けられ、各セクションでは4から5の発表がなされた。興味深く知見を新たにする発表ばかりであったが、中でもとりわけ衝撃的だったのは、「保存とカタログニング」セクションの最後の発表となった、ドイツ映画協会(DIF, Frankfurt am Main)のゲオルク・エクスとソフトウェア開発者のドートレフ・バルツァーの共同による、ヨーロッパのフィルム・アーカイブを中心とした映画の国際的なメタデータ標準規格「EN15907」の制定とその運用状況の報告だった。

「EN15907」は2005年、欧州連合の支援を受けて創設された欧州標準化委員会(CEN)の下部組織・技術委員会372(TC 372)によって2010年に制定されたメタデータ標準規格である。技術委員会372には、ヨーロッパの複数のフィルム・アーカイブや他の文化遺産機関から専門家たちが集められ、フィルムグラフィ情報の交換の支援、ヨーロッパの映画遺産へのアクセスの改善、そしてヨーロッパ映画の普及の強化を目的として、映画資料の目録化と索引作業の標準規格が作成された<sup>1)</sup>。2人の発表によると、2013年4月時点において、ヨーロッパの10近くのフィルム・アーカイブで、この標準規格の採用や検討が進んでいるという。

メタデータとは、文字通りデータに関するデータのことであり、タイトル、人名、データ作成日時や注釈など、データを管理し検索するためのラベルのようなものである。フィルム・アーカイブのような膨大なコレクションを所蔵する機関にとって、そのデータベースは活動のエンジンにあたるものだが、異なるアーカイブ間ではデータベースの設計思想もしばしば異なるため、個々の項目の記述レベルや項目間の関係を分類整理することが重要になる。メタデータの標準規格を作成することの真の目的もそこにある。

「EN15907」は、国際図書館連盟(IFLA=International Federation of Library Associations and Institutions)によって1998年に刊行された「書誌学レコードの機能要件」(FRBR=Functional Requirements for Bibliographic Records)モデルから多大な示唆を受けながら、書籍ではなく映画に特化して作り直したものである<sup>2)</sup>。FRBR(しばしば「ファーパー」と発音される)が分けた4つの記述レベル、「著作(Work)」「表現形(Expression)」「体現形(Manifestation)」「個別資料(Item)」<sup>3)</sup>は、「EN15907」では「映画作品(Cinematographic Work)=映画を媒体とした唯一の著作」「異版(Variant)=オリジナルの映画作品からの変更」「具現形(Manifestation)=映画作品あるいは異版の物理的/デジタル的具現化」「個別資料(Item)=具現形の個別の例」に変更されている。たとえば、『忠次旅日記』を例にとると、「1927年に日活大將軍で製作された伊藤大輔監督による三部作」という記述は「映画作品」のレベルであり、「1991年に発見された版」や「2011年にデジタル復元された版」が「異版」レベル、「16fps・104分の35mm可燃性ポジ」や「16fps・111分のデジタル復元版35mmポジ」が「具現形」レベル、「フィルムセンター相模原分館の保存棟Iの部屋番号〇〇の棚番号△△に保管されている3缶のポジ」といった記述が「個別資料」レベルに相当する、といった具合である。とりわけ「異版」は、マルチバージョンを数多く抱えるフィルム・アーカイブの実情に対応して考案された記述レベルである。

このメタデータ標準規格「EN15907」が、書誌情報学史においてどれだけ画期的であるのかに関しては、現在の筆者の能力を超えているため、論評することはできない。だが重要なのは、こうしたメタデータ・セットの制定が、フィルム・アーカイブの直面する現在の課題に応じて実現したことである。その課題とは、一つにはアーカイブ間の相互運用性への要求の増大である。近年、欧米を中心とした各フィルム・アーカイブでは、複数アーカイブ間の協力による復元プロジェクトが盛んになっており、それは公的支援や民間助成等の獲得という財政的観点においても重要である。先に述べた英国映画協会によるヒッチコックの現存する9本の無声映画復元プロジェクト「ヒッチコック・ナイン」はその最たる例であり、他のアーカイブから最良の素材を集めて最も「オリジナル」に近い

東京国立近代美術館フィルムセンターは、国際フィルム・アーカイブ連盟(FIAF)の正会員です。FIAFは文化遺産として、また、歴史資料としての映画フィルムを、破壊・散逸から救済し保存しようとする世界の諸機関を結びつけている国際団体です。

National Film Center (NFC) of The National Museum of Modern Art, Tokyo is a full member of the International Federation of Film Archives (FIAF). The Federation brings together institutions dedicated to the rescue and preservation of films, both as elements of cultural heritage and as historical documents.

東京国立近代美術館ホームページ

<http://www.momat.go.jp/>



フィルムセンター携帯電話用  
ホームページ

<http://www.momat.go.jp/nfc/k/>

お問い合わせハローダイヤル

☎03-5777-8600

「NFCニューズレター」第110号

(2013年8月-9月号/隔月刊)

[発行・著作]

独立行政法人 国立美術館/東京国立近代美術館◎

[編集]

東京国立近代美術館フィルムセンター

〒104-0031 東京都中央区京橋3-7-6

☎03(3561)0823

[編集協力]

佐々木 淳

[デザイン]

ダイアローグ

[印刷]

成旺印刷株式会社

[発行日]

2013年8月1日

\*無断転載を禁じます。

NFC NEWSLETTER

Bimonthly

(Volume XIX No.3 August – September 2013)

Published and Copyrighted by

The National Museum of Modern Art, Tokyo ©

(Independent Administrative Institution National Museum of Art)

Edited by

National Film Center

(The National Museum of Modern Art, Tokyo)

Addr.: 3-7-6 Kyobashi, Chuo-ku, Tokyo 104-0031, Japan

Tel.: 03(3561)0823

With Assistance of

Atsushi Sasaki

Designed by

Dialogue

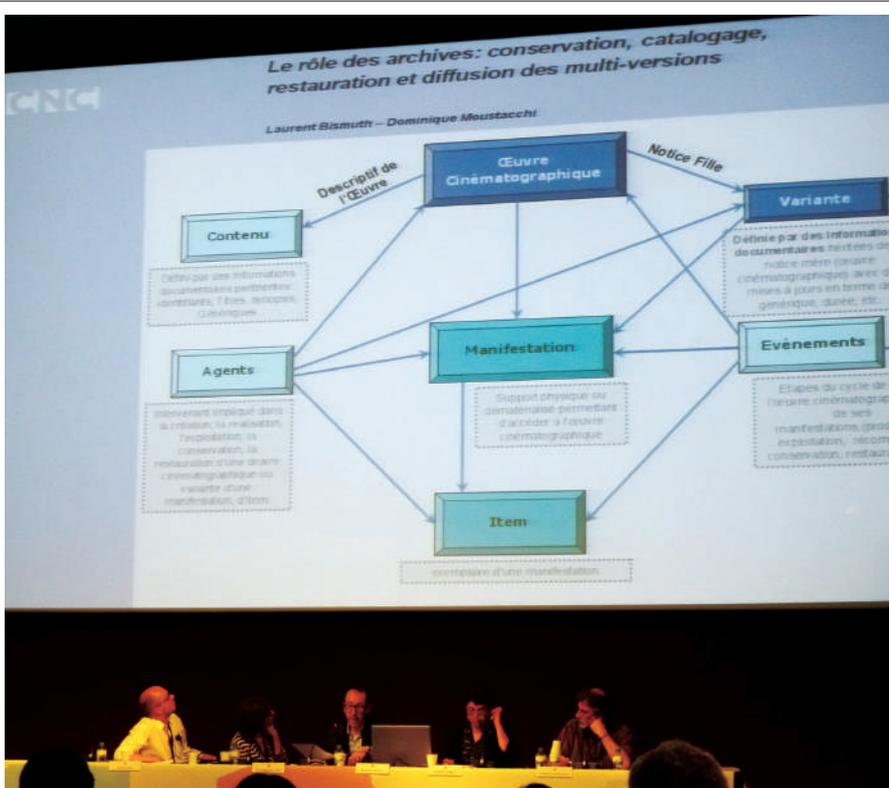
Printed by

Seio Printing Co.,Ltd.

Date of Publication:

August 1, 2013

\*No part of this publication may be reproduced or reprinted without the approval of the publisher.



▲シンポジウムでの発表の様子

復元版を作製するという試みである<sup>4</sup>。また、映画フィルム以外の関連資料にも目を向けられれば、フィルム・アーカイブ間のみならず、図書館や博物館等、隣接分野のアーカイブのデータベースとの相互運用性も必要となる。つまり、映画に特化していると同時に、既存の書誌情報学的なデータベースとも翻訳可能なメタデータ・セットが求められている。課題の二つ目は、アーカイブ活動が一般市民にとって可視的であるために、より詳細な映画情報を公開する必要があるということだ。ワールドワイドウェブ・システムとブロードバンドが普及した今日において、それはオンライン上の検索・調査・研究、ひいては直接の資料閲覧へと至るだろう。

しかしそれにしても、ヨーロッパ各国の、映画文化・映画遺産の新たな価値創造に向けた貪欲さと実行力には感心するばかりである。「マルチバージョン」は映画製作に本源的に付随する事象と言えるが、伝統的に「映画先進国」であり、映画の輸出入や共同製作が盛んだヨーロッパ諸国において、とりわけ多数の例が存在している。また、それゆえに所蔵フィルム(特に無声映画)が相対的に多く、アーカイブも国内に複数存在する豊かな保存環境にあるため、アーカイブ間の連携事業や共同研究も旺盛である。各アーカイブの所蔵フィルムの、現に存在する個別の価値に自足せず、相互運用によ

って互いに価値を高めていく戦略が意図的に採用されているのであり、そうした相互運用を実現するメタデータ・セットそれ自体が、デジタル時代のフィルム・アーカイブの今後にとって、重要な知的財産となるのである。シンポジウムでは、「EN15907」にはまだ実践的な課題が多いことも指摘された。また、ヨーロッパ主導のこうしたメタデータ標準化の動きが、言語や歴史的・映画史的な文脈の異なる日本やアジア諸国にそのまま適用できるかどうか不明である。だが少なくとも、われわれはこうした世界的な動きに意識的でなくてはならないし、日本国内の映画データベースの現状を認識し、その文化資産的な可能性を探求することから始めるべきだろう。

(フィルムセンター研究員)

註

1 "Cinematographic Works Standards (CEN. BT TC 372)." ([http://www.ace-film.eu/?page\\_id=152](http://www.ace-film.eu/?page_id=152)). また、EN15907を始めとするCEN制定のメタデータに関しては、[filmstandards.org/](http://filmstandards.org/)による次のウェブサイトを参照されたい。[http://filmstandards.org/fsc/index.php/Main\\_Page](http://filmstandards.org/fsc/index.php/Main_Page)

2 カタログリング規則に関しては、FIAFが1991年に制定した「フィルム・アーカイブのためのFIAFカタログリング規則」を、現在、コンピュータ/デジタル時代に適応させる形で大幅に改定中であり、今回の会議でも担当委員会から新規規則の草稿の完成が報告された。この草稿にも、FRBRおよびEN15097のメタデータ構想は採り入れられ、反映されている。

3 日本語訳に関しては、日本図書館協会による次のものを用いた。和中幹雄、古川肇、永田治樹訳「書誌レコードの機能要件」(日本図書館協会、2004年、<http://archive.ifa.org/VII/s13/frbr/frbr-jp.pdf>)

4 <https://www.bfi.org.uk/news/restoring-hitchcock-1-how-film-restoration-begins>